

一・ 召喚され、捨てられ、遭遇してしまいました

「恨むんなら、力のない自分自身を恨むんだな」

そんなベタな悪役っぽいセリフを吐き捨てて、男はローブをひるがえし去って行った。

はあ？　そもそもこっちに呼んだのあんたたちでしょ！

そう叫びながら、思いつき走り込んで飛び蹴りのひとつでもしてやりたかったけど、ご丁寧に猿ぐつわをされ木に縛り付けられるから、それもできない。

必死に縄から抜け出そうと身をよじっていたら、風に揺れる木の葉の音が不気味に聞こえて、思わず固まってしまった。

ビクつきながら辺りを見回せば、幾つもの木々がまるで影のように立っている。そんな深い森の奥に、わたしは一人置き去りにされてしまっていた。

ここが森のどの辺かもわからないけど、かなり長いこと歩いて来たことだけは確かだ。しかも、ここが何ていう森かも知らないし、国の名前だって知らない。

なぜなら、ここは異世界だからだ——たぶん。

一時間ほど前、深夜遅く自宅に帰った途端、強い光に包まれたかと思うと、次の瞬間にはもう見知らぬ大きな広間の真ん中にいた。

周囲には、怪しげなローブ姿の男たちがいて、最初は「召喚が成功したぞ！」って喜んでいた。

意味もわからず男たちに囲まれてるもんだから、最初は身の危険を感じていたんだけど……。

「では早速、聖女としての力を見せていただきたい」

目をギラつかせ、満面の笑みを浮かべた男たちが要求したのは、それだった。

もうね、「知らんがな」って言うしかない。

深夜遅くまで働いて、くたくたで帰って来たっていうのに。

ようやくご飯食べれる！ 寝れる！ って思ってたのに。

断りもなく知らない場所に連れて来られて、『聖女としての力を見せろ』とか言われてもさあ……。

だけど、「さあ！」って老齢の男性に居丈高に言われ、つい社畜

根性を發揮してしまっていた。

指示されるまま、何やら呪文のようなものを言わせられる。

ところが、彼らが思っていたような反応が見られなかったらしい。
今度は若い男が自分で手に切り傷を作って、その傷に向けてまた別の呪文を唱えろと言う。

言われた通りに呪文を唱えるけど、やっぱり何も起こらない。

「……」

「……」

かなり長い沈黙が続く。

気まづくなつて口を開きかけた頃、ようやく一番年配と思われる男が沈黙を破った。

「初の試みは失敗じゃ。この娘に相応しい場所へ連れて行ってやれ」
そうして、わたしはこの森へ捨てられた。

……いや、ひどくない？

失敗したからって、森に捨て置くとか鬼畜すぎない？

思いつきり叫んで怒りを発散させたかったけど、猿ぐつわされて
るし、周り是不気味な森の中だし、ただ誰かが通りすがって助けて
くれないかと願うことしかできない。

「うゝ……」

っていうか、そんなことより眠くて瞼が重い。

毎日のように深夜帰宅で、最近ろくに寝れてないから、もう眠気が限界。

こんな森の中で、しかも木に縛り付けられてる状態で、絶対に危険だってわかってても眠たすぎる。

だけどその時、うつらうつらしていたわたしの耳に、明らかに何かが草木を揺らす音が聞こえ、ハッと目が覚める。

人間なら助けてもらえる！

そう思って期待しながら音がした方を見て――

「……う？」

一瞬、時間が止まる。

え、待って。

この世界って、そういう感じ？

「ううーう？」

スライム？

そう、草むらから出てきたのは半透明のスライムみたいなの……いや、うん、スライムだった。

働きづめだった毎日、貴重な隙間時間で漫画を読むのが、わたしの癒しだった。あらゆる漫画を読み漁っていたからわかる。あれは間違いないスライムだ。色は思ったほど青っぽくないけど、ツヤツヤでぷるつとした感じは絶対そう。

スライムは草陰から現れてすぐ動きを止めたけど、わたしの存在を感じしたのかナメクジみたいに、じわじわとにじり寄ってくる。

えっ!? うそ！ 襲われる！

「うーっ！ うーっ！……う？」

でも待って、これどっち？

捕食されて体を溶かされて殺される方？

それとも、服を溶かされて裸にされて襲われる方？

どっちの漫画も読んだことある——って、どっちにしたって危機には変わらない。

そんなことを考えてるうちに、スライムがすぐ足元まで近づいて来ていた。思ったよりも大きくて、人間一人くらいなら丸飲みもできてしまいそう。そんな大きなスライムの体から、うにゅつ、と触手みたいの一部が伸びて足に巻き付く。

やだっ！ 死にたくない！

だけど、触手はストッキングを溶かすことなく、巻き付きながら

登ってくる。スカートの上を這い、上半身を通って——顔を目指して
るみたい。

「……っ!？」

もしかして、そんなスライムが出てくる漫画なんて読んだことないけど、人間の脳みそを食べるのが好き、とか？

何そのゾンビスライム!？」

自分で想像してゾツとしてしまう。恐怖で硬直するわたしの、文字通り目と鼻の先の距離まで触手が到達し——

「ううーっ……っ!？ うぐ、ぷはっ、はぁ……?？」

なんとスライムは猿ぐつわを器用に掴み、下へズラしてくれた。うへえ、口元が涎でべとべと……。でも、なんで取ってくれたん

だろう。

どう反応していいのか戸惑っていたら、どこからともなく、くぐもった声が聞こえてきた。

『――聞こえる……僕のこえ……わかる？』

直接人間がしゃべるのとは違って、水が張った膜のようなものの向こうから、声が聞こえてくるような感じだ。

一体どこから？

慌てて辺りを見回し、ハツとして足元のスライムを見る。

まさか……。

『気づいてくれたみたいだね。僕の声、聞こえてるよね？』

確かに、聞こえてる。

柔らかくて、どこか朗らかな男性の声。

これがスライムの声？ 見かけによらずイケボなんだ。それに、一人称「僕」なんだ。っていうか、普通にしゃべるんだ……。そっか、漫画でもそうだったっけ……？

そんな現実逃避をしている間に、スライムは勝手に話し始めていた。

『きみ、なんでこんなところに縛られてるの？ 奇妙な格好してるけど——でも、不思議な力を感じる』

猿ぐつわを取ってくれた触手が、そのまま頬を撫で、顎をなぞり——違う、涎を掬い取りながら口元に近づいてくる。

『なんだか癒しの力を感じるような……』

「ひ……っ、ん……あう」

とんでもないことに、触手が唇を割って中に侵入してきた。
しかも、縮こまる舌に強引に絡んでくる。

くちゅ……ちゅっ……にゆるっ、ぢゅっ♡

うう、いやらしい動き……って、ちよつと待って！

やっぱり“そっち”の方の“襲う”なの!?

必死に顔を背けて逃げようとしたら、口から出て行った触手が、
まるでしょんぼりするみたいに首を垂れる。

『そんなに僕がイヤ？ 気持ち悪い?』

「えっ……あの……」

待って、なんでわたしが申し訳ない気持ちにならなきゃいけない

の？

スライムに襲われたら、誰だつて嫌がるでしょ。

そう言つてやりたいのに、ショックを受けてるらしいスライムを見ると、言葉が出て来ない。

でも、このスライム何だかスライムっぽくないかも。「っぽくない」つて言うほど、スライムのこと知ってるわけじゃないけど。

もしかしたら、話せばわかつてくれる？

「あの……イヤつていうか、あなたスライム？つていうモンスター、よね？ 今わたし襲われてるんだと思っただけど……」

うーん、何だかスライムに向かつて話しかけてるなんて、変な感じ。

ところが――

『いや、僕はスライムじゃないよ』

「えっ!？」

半透明のぷるぷるした姿をしておいて、スライムじゃないと？

『事情があつて、こんな姿になってるんだ。だけどたぶん、きみの協力があれば元に戻る気がする』

「協力？」

『きみも事情があつて、ここに縛られて放置されてるんだよね？

どうだろう。縄をほどこいて安全なところまで連れてつてあげるから、きみの力で僕を助けてくれない？』

「……」

思わず考え込んでしまう。

スライムじゃないらしいけど、スライムみたいな姿をした何者かに、協力関係を持ち込まれてる。何となく、素直に頷きにくい。

わたしの沈黙に何かを感じ取ったのか、スライムが言葉が続ける。
『この森、比較的安全だけど狂暴な獣や魔物がまったく出ないわけじゃないし、夜だともっと危険だよ。町からも遠いし——』

「き、協力って何をすればいいの？」

慌ててスライムの提案を飲めば、その触手がツイつと頬を撫でた。
『きみはそのまま、じつとしてくれてたらいいよ』

そう言ったスライムが、なぜかにんまり微笑んだように見えた。



にゆる……ちゅっ♡じゆるっ……くちゅ♡

「ん♡んっ……♡や、んああ……♡ひっ……っ♡」

再び触手が口にねじ込まれる。まるで何かを味わうみたい、ねっ
とりと口内を舐^{ねぶ}り舌に絡みついてくる。

『ああ、癒される……それに、その声も心地いい』

そんな意味不明なことを言いつつ、さらに二本の触手を伸ばして
くると、ブラウスの前を強引に引き裂いた。

『不思議な形の肌着だね？』

なんて戸惑ったのも一瞬で、すぐにブラジャーの中に触手が侵入

してくる。肌に食い込むほど強く巻きつかれ、揉まれる感覚に身をよじっていたら、いつの間にか乳房が晒されてしまっていた。

それだけでなく、胸の先の尖りに器用にも巻きつくと、硬くなったそれを執拗に弄り倒されてしまう。

グニグニ♡ピンツ♡きゅううつ♡

抓られて肩が跳ね、弾かれて震え、引っ張られるとつい、背中が浮いて爪先まで力が入っちゃう。

「あ♡あ♡やだあ……なんで……♡ひうつ♡」

結局わたし、スライムに襲われちゃってる。

いや、スライムじゃないらしいけど。それに、なんでこれが『協力』になるのかもわからないんだけど。

『ああ、きみのその声、とても甘美に聞こえる……もつと聞かせて』
そう言って触手が、指先でそうするみたいに乳首を摘んでねじる。
コリコリ♡グニグニ♡きゅっ♡ぎゅむっ♡

「やっ♡ああっ♡ん……ッ♡それ、や……あ♡」

いやって言いつつ、漏れる声が喘ぐみたいになってる自覚はある。
スライムに乳首いじられてこんな——って思うのに、でも止められない。

『ああ、もう我慢できない』

「えっ——ひあっ!？」

ふいにスライムが、体をぶるりと震わせて膨張した、ように見えた。

実際は膨張というより、塊だった体を大きく広げたい。

それでわたしの体を覆って——ってなにこれ!?

べったりくっついて、全身まさぐられてるんだけど!

服の隙間という隙間からスライムが侵入し、ぷるぷるした感触で全身を撫でまわしてくる。

「ひっ♡ あ♡ くすぐった……ッ♡ はあ♡ あ……♡ ん♡」

くすぐったいのと、ゾクゾク♡するのとで、背筋が震える。

だけど、すぐにもスカートの中から、ビリッとストッキングが破ける音がして、何となく溜息をついてしまった。

やっぱり、そうなるよね……。わたし、スライムに……。

ぬち♡ぬちや……♡ぬぢゅっ♡

「ひゃっ！ やあっ……っ♡」

落ち込んでる場合じゃなかった。

スカートの中になつてゐるのかわからないけど、ショーツの上から少し硬い感触のする何かが、割れ目をなぞっていくのを感じる。
『濡れてる……感じてゐるんだね』

言葉にされて顔が熱くなる。

スライムの言う通り、撫でられる度にショーツの中で、にゆる♡にゆる♡って湿った感触がしてゐるのがわかる。

うう……すごく恥ずかしい。

それに、スライムに思ふとなんだか屈辱的。でも……。

にゅっ♡ちゅ♡ちゅく♡ちゅくっ♡くちゅう♡

「はう♡んん……♡あっ……♡ふっ♡」

ショーツの端から侵入され、直に割れ目を撫でられると「悔しい」より、気持ちいいのが勝ってしまう。

恥ずかしい音をさせて、何度も撫でられ、さらに――

「ああっ♡やだ、そこっ……い♡んんっ♡」

陰唇の先、硬くなりかけた突起に触れられて、腰が跳ねる。

本当は腰を引いて逃げたかったけど、木に縛られたままだから逃げられるわけがない。それでも、諦め悪く腰を揺らしてしまう。

『逃げないで、もっとよく味わわせて……ああ、甘美だ』

「――っ♡あっ♡♡」

グリグリ♡ってクリを押し潰しながら擦り上げられて、ほんの一

瞬だけ頭が真っ白になる。無意識に腰を突き出して、つい、はしたない姿をさらしてしまっていた。

危うくイキそうになって、入り口がヒクつき息が弾む。

体が本格的に、じんわりと熱を持ち始めたのを感じる。

『ん……蜜がいっぱい溢れてきたね、美味しい』

さっきから『甘美』だとか『美味しい』だとか、やめて欲しいんだけど……。何となく、口でされてるのを想像してしまって、居た堪れない。そう思うと余計に、クリを撫でるそれが人間の舌のように感じてきちゃう。

れろ♡じゅるっ……♡ぐりゅ♡ぢゅ♡ぢゅ♡れろっ♡れろっ♡
「ひあっ♡♡っふう……♡ん♡ん♡はあ……♡やんっ♡あ♡あっ♡」

舌のようなそれが何度もクリを舐め上げ、押し潰される。押し潰しながらこね回され、パンパンに腫れあがったそれをまた優しく転がされる。

気が付けば、太腿の間が愛液でびしょびしょなのが、見ないでもわかってしまった。わたしの昂ぶりに合わせるように、舐め擦る動きも大胆になっていく。

そして、あと少しで——というところで愛撫が止んだ。

「っ♡は、ん……♡はあ……♡」

今度は、別の意味で息を吐いてしまった。だけど——

ぬぢゅ♡つつつ……♡

「あっ……♡んふうっ♡♡」

それまでクリをいじっていたそれが、下へ——膣口にあてがわれたかと思うと躊躇なく、ぬぷっ♡とねじ込まれた。

ああ、入ってる……♡スライムがわたしのなかに……♡

侵入はそれほど深くなかったけど、ぬぷ♡ぬぷ♡って出し入れされるだけで、もう気持ちいい♡

「ん♡っ♡は♡はあ……♡あっ♡ああっ♡♡」

スライムに覆われた下半身が、みっともなく揺れてしまう。

『気持ちよさそうだね？ 蜜がいっぱい溢れてきてるよ。そろそろ、いきそう？』

気が付くと、無意識に首を反らし喘いでいた。

頭が真っ白になりかけてる。

そんな状態だからか、笑い含みのイケボで『いきそう?』って聞かれて、つい素直に頷いてしまっていた。

「ん……♡ うん♡ イきそ……♡ あ♡ つん♡ イツちゃ……♡ イツちゃ♡ はっ♡ んん……♡ っ♡」

『イツていいよ』

「ああっ♡♡」

一層深くそれがねじ込まれて、入り口を拡張られる。先っぽが内側をぐりっ♡と押し上げてきた。

それと同時に、放置されてジンジン♡していたクリを抓られて——
「っっ♡♡ いっ、く——ッ♡♡♡」

腰が跳ね上がり、なかに侵入したスライムをぎゅうつ♡と締め付

ける。息を詰め、一瞬だけ体が強張り、すぐに痙攣が膣肉から広がっていく。

脱力し、ヒクヒク♡っていやらしく蠢くなから、ぬぼっ♡てスライムが出て行くのを感じた。その刺激だけで腰が揺れる。

思わず目を閉じて、余韻に浸ってしまっていた。

そんなわたしの耳元で声がある。

『イツちやったね。一生懸命、なかが痙攣してて可愛い。それに、きみの力すごいね。もう人の形に戻りはじめてる』

スライムの言葉を聞くともなく聞いていたけど、ハッとして目を開ける。すると目の前に、人の顔を模ったスライムがいた。

半透明だからよくわからないけど、目鼻立ちがしっかりしたまだ

若い青年っぽい。元の人間の姿に戻ろうとしている、らしい。

これをわたしがやったの？ わたしの力が彼を人間に戻してるの？
どうやって……？

だけど、そんなこと考えてる場合じゃなかった。

ふと違和感を覚えて下半身を見る。彼の姿はまだスライムと人の形と半々っていう感じ。なのに、下腹部になにか硬いモノが当たってるのがわかる。

半透明だから、見た目じゃ何もわからないのに。

思わず顔を真っ赤にしてると、目の前のスライムが——じゃない青年らしき人物が、クスツと笑ったように見えた。

『ごめん、初めてだよね。なるべく痛くないようにするから、力を

抜いて』

スライムから現れた腕が、スカートを捲り上げながら、足を広げつつ持ち上げる。

いつの間にかショーツもズラされて、恥ずかしいところが晒されてしまってる。羞恥に耳まで熱くなってきた。

え、でも待って……ほんとに、するの……？

戸惑うわたしのアソコに硬い何かが触れ――

ぬち♡くぷっ……♡ずちゅううう……♡

「っ……あ……っ、っ……」

うそ……ほんとに、挿入ってきて、る……お、思ってたより、おつきい……。

入り口をめいっぱい抔げられて、大きなモノが強引にねじ込まれる。

その苦しさに息が詰まり、涙が滲んだ。

圧迫感がすごい……苦しい……。

さらに一瞬の痛みに、喉の奥で小さく悲鳴を上げる。

ぎゅ、と目を閉じたら、涙が一筋こぼれていった。

『ああ、泣かないで……』

顔を寄せる青年が、頬を伝う涙を舐め取っていく。

『初めてだと、僕のモノは大きすぎる、よね……』

そう言いながら、まだたぶん半分も挿入^{はい}っていないそれが、ゆっくりに引き抜かれていく。

出て行ってくれるのかと期待した、けど、そんなわけなかった。

『でも、ごめん。やめてあげられない』

ずちゅっ♡ぐぶぶ……♡ずぶぶぶっ♡

「ひっ——あ……っっ」

硬くて大きな塊が、またわたしを引き割いた。

はじめてなのに……こんなおっきいの……ひどい……。

だけど苦痛を覚えるわたしとは違い、人間の姿を取り戻し始めた彼は、気持ちよさに息をついている。

そして、容赦なく大きなそれで奥を抉ってくる。

『ああ、気持ちいい……狭くて、熱くて……蠢きながら、吸いついてきてる、っ』

そんなわけないって思うのに、そう言われると意識してしまう。

大きなモノが深くねじ込まれる度、引き攣れたようにヒクつきながら、柔肉がそれを締め付ける。引き抜かれると今度は、締め付けてた襷が引つ張られて——それが本当に吸いついてるみたいで……。

「んあっ♡やだ……♡そんな……うそ……っ♡っ♡♡」

意識すればするほど、体が敏感に刺激を感じ取って、苦痛の中に別の感覚があるのに気づき焦る。

くちゅっ♡ぐぷっ♡ぐぷっ♡じゅちゅっ♡ぶちゅっ♡

卑猥な音が耳につき始め、そんなはずないって思うのに、体はちゃんと快感を覚えてることを、突きつけられてしまう。

「んんっ♡は、あっ♡やめ……てえ♡んあっ♡いんっ♡」

強張っていた体に、いつの間にか甘い痺れが広がっていく。それと一緒に力が抜けていって、顔もだらしなく緩んでいってる気がする。

ぬらぬら♡彼のモノが抜き挿しされる度、小刻みに腰が揺れてる自覚もある。

だけど、それを認めるのが何だか怖い……。

そんな戸惑うわたしの頬を、青年の手が優しく撫でていく。

『ああ、きみも感じてるんだね』

「っ♡ち、ちがう……ひっ、ん♡んっ♡は、あ♡」

『違うの？　じゃあ、きみの口から漏れてるこの声はなに？』

そう言いながら青年は、体からまた触手を伸ばすと、開けっ放し

のわたしの口にねじ込んできた。

『さつきからずつと甘い喘ぎ声ができるけど、これはなに？』

「ひう♡ん……♡えあ♡うう……♡ちあう……ちが——ッ!？」

唐突に、強い衝動を感じて息をのんだ。

一瞬、激しく体が揺えられる。

彼が少し乱暴に、奥を突き上げてきたからだと遅れて気づく。

「あ……ああ……」

気づくと同時に下半身で、彼のモノがずろお♡と引き抜かれるのを感じ、戦慄する。

「や……やえて……」

触手に口内を侵略されたまま、思わず首を振って懇願した。

だけど、彼の返答は容赦なかった。

ずぶっ！♡ぬぶうう！♡

「ひiiiiiiiiっ!!」

悲鳴が森の中に響く。

大きなそれが一気に深いところまで埋められる。奥を抉りながら、力強く突き上げられて、その強い衝動に体が強張る。

ひどい……やめてって言ったのに……。

この人、絶対サディストだ。関わっちゃいけない人だったんだ……。また、こぼれる涙を舌で舐め取られる。

半透明だからわかりづらいけど、その口角が上がってる気がする。『ちよっと乱暴だったかな。でも、きみが意地を張るからだよ?』

「……」

そんなの、むちゃくちゃだ……。

嘆くわたしの下半身では、ゆつくりとした律動が始まる。

それがまた、いつ乱暴になるかと思うと怖くてたまらない。

なのに――

ずちゅ♡ずぬう♡とちゅ♡とちゅ♡ず、ずろお♡……♡ぶぽっ

♡ぐぶっ♡ぐぶぶ……♡とちゅ♡とちゅ♡

「っは♡はあ……♡あっ♡ん♡んあっ……♡や♡ん♡」

彼のモノが抜き挿しするのに合わせて、腰が揺れるのが止まらない。

もう、それを認めないわけにはいかなかった。

『はあ、きみのなか、すごく気持ちいい……きみも、気持ちいいよね？』

「はっ♡ん♡ あ……♡や、あ——ひっ♡」

つい言い淀んでいたら、先端でグリッ♡と強く奥を押し上げられて、思わず背筋にゾクツと何かが這う。

肩が跳ね、腰を震わせつつ慌てて頷く。

「き、きもちいい♡ん♡ん♡♡はあ……♡きもちいい♡から……あ♡」

『気持ちいい「から」、なんだろう？』

「んっ♡ん……♡乱暴、なのは……っ♡こわい……いんっ♡」

『そっか、じゃあ、これくらいならいい？』

尋ねながら、ちよっただけ律動が速くなる。

とちゅ♡とちゅとちゅ♡とっ♡とっ♡とっ♡とっ♡

「あっ♡あっ♡♡いっ♡♡んっ♡♡いい……♡♡」

微かに体が揺さぶられるくらいの突き上げが、お腹の奥から甘い痺れを全身に伝えてくる。

喘ぎっぱなしの唇が戦慄わななき、新たに涎を垂らしてしまう。

あー……♡きもちいい♡なんでこんなに気持ちいいの……♡♡

相手は半透明のスライムもどきなのに。

イケボで優し気なしやべり方をする人だけど、でも絶対鬼畜なのに！

こんな状況で木に縛られたまま犯されて……でも気持ちいいなんて絶対ヤバイ。なのに、もう頭が真っ白で「気持ちいい」ってこと

しか考えられない。

「ん♡ひっ♡そこ♡きもちいっ♡はっ♡はっ♡おく……♡そこ、
いい♡♡」

『ん、ここ？ 余程気持ちいいんだね、きみイキそうでしょ？』

「え……♡あ♡い、く？♡はあっ♡んんっ♡♡」

『だって、すごい締め付けてくる。こんなに締め付けられて、正直僕ももう限界。だから、一緒にイこう？』

「い、くっ♡♡はっ♡はっ♡一緒に♡♡」

その時、バチンッ♡て肌を打つ音が響いて、一瞬息が詰まる。

同時に体が激しく打ち付けられて、全身が強張る。

「っっ!?♡♡~~~~♡♡っ♡♡っは♡♡はあっ♡♡や、ああっ♡♡らんば

う、にっ♡しないって♡えあ♡いった、のにい♡♡いひい♡♡」

『ん、ごめんね、やっぱり無理♡』

「ひうつ♡♡」

ひどい……やっぱりこの人って……。

抗議したい、罵ってやりたいって思うけど、今はそれどころじゃなかった。

『きみの力、やっぱりすごいね。もう、ほとんど人の姿に戻ってる』
体を打ち付ける衝動と一緒に音がするのは、彼の体のほとんどが
人の形に戻ってるからだった。

わたしの足を腕で抱え上げ、露わになった秘部に肉杭を突き挿し、
力強く腰を打ち付けている。

未だ体のほとんどが半透明のままだったけど、長身でそこそこ逞しいと思われる肉体が、何となく見て取れる。

だけど、わたしにそれ以上彼を観察する余裕も、驚いている余裕もない。荒々しく腰を打ち付けられ、同じように荒々しく奥を突き上げられてしまっている。あの大きなモノで……。

どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡

パンツ♡パンツ♡パンツ♡パンツ♡

「ひっ♡♡んあっ♡♡はげし♡♡ぐんっ♡♡はあっ♡♡おくっ♡♡はげしっ♡♡♡」

なかをみっちり♡拡げる太い陰茎で擦り上げられ、硬い先っぽでどちゅどちゅ♡奥を貫かれて、思考が次から次へと快感で塗り潰さ

れていく。

拘束された体を必死にしながら、重ねられる快感を逃がそうとするけど、激しくなる律動にそれも追いつかない。

ピン♡と強張る爪先が丸まって、じゅぼじゅぼ♡挟られる膣肉が引き締まっていく。すると刺激が強まるのと同時に、肉茎がドクン♡と膨れ上がるのを感じた。

「あ……♡くる……♡♡きちやう♡♡♡」

『ん、はあ……出すよ』

間近で彼の吐息を感じた。

一時、律動が激しさを増す。

間断なく奥を突き上げられて、頭の中は彼のモノでいっぱいだった。

た。

どちゅどちゅ♡どちゅどちゅ♡どちゅどちゅどちゅ♡どちゅどちゅ♡

パンパン♡♡♡パンパン♡♡♡パンパン♡♡♡

「あ♡♡♡♡あ♡♡♡♡す♡♡♡♡も♡♡♡♡イツ♡♡♡♡う♡♡♡♡
いく♡♡♡♡」

『はあ……僕も、もうっ』

なかで肉茎が一層大きく膨らみ、脈動を始めた。

握りしめる膣肉を容赦なく挟る、その力強い動きに、散々快感を叩きつけられた膣奥が音を上げた。

「♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡いく♡♡♡♡♡い♡♡♡♡♡~~~~♡♡♡♡♡」
きゅ♡♡♡と切なく膣肉が熱杭を締めつける。

途端、彼が頭上で小さく呻いたかと思うと、荒々しく腰を突き上げた。肌を打つ音を高く響かせて、大きな肉棒が最奥に叩き込まれる。

体が大きく跳ね上がって、お腹の奥から電流みたいな強い快感が走り抜けた。

『はっ、っ——でるっ、っ』

ぎゅうぎゅう♡抱きつく媚肉に挟まれて、熱杭が爆^はぜる。

締め付けるのをものともせず、ドクドク♡と力強く脈動させて、先端から熱いものを迸らせる。

息もできないような絶頂感に、苦悶の表情を浮かべていたのも、ほんの一瞬だったと思う。

迸る熱いものが奥へ叩きつけられ絶頂から落とされると、だらしなく緩んだ顔をさらして痙攣に震えた。

「~~~~~……っ♡はぁ……♡ん……♡はぁ……♡」

全身をぐったりさせて荒い息をつきつつ、余韻にどっぷり浸る。

膣肉がずっと痙攣を続けていて、まだ射精の止まない熱杭に、吸いつくような動きをしてるのが恥ずかしい。

「はぁ、気持ちよかった……ね？」

「……ん」

ふいに顎を持ち上げられて、唇が重ねられる。

その感触がいやにリアルで、ゾクリ♡と背筋が震えた。

スライムっぽくない、まるで人間の――。

だけど程よい倦怠感が、忘れていた疲れと睡魔を呼び起こしたみたい。すごく眠たくて、瞼が重くて、目が開けていられない……。

「眠たいの？」

「うん……」

「いいよ、ゆっくり休んで、おやすみ」

「おや、すみ……なさい……」

薄れていく意識の中で、「僕の聖女」とイケボで囁かれるのが、聞こえた気がした。